
英雄の娘は転生者

久我原 紗江

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

英雄の娘は転生者

【Nコード】

N3951N

【作者名】

久我原 紗江

【あらすじ】

いつの間にか死んでいた少年が神を名乗る美人に出会い転生されるお話。原作に沿う形になるので、余り変化は見られません。強いてあげるならネギ君の影が薄くなる程度。

筆者はこれが処女作なので、厳しいところは見逃してください。

感想、指摘等あれば随時修正していきますので、どうぞよろしくお願います。

転生、あるいは設定（前書き）

皆さん始めまして。久我原です。

他の方の二次創作とかを見てノリと勢いで作ってしまった駄文です。至らない点もあると思いますが、なにとぞ生暖かい目で見守っていただけると幸いです。

転生、あるいは設定

Side : ????

目が覚めたら真っ白な部屋にいました。……っーか、

「どこです？」

「目が覚めましたか」

声をたどると、なんかすごい美人が立っていました。

「で、ここどこですか？」

「死後の世界ってことで。あ、それとあなたは死にました」

「ふーん、死ん って、そんな重要なことサラッとやらないで下さい！ てか死んだのですか!？」

「ええ、死にました」

いや、まあそんな予感はずうずうしてたんですけどね。

「で、俺はこれからどうなの？」

「それなんですけど、ちょっと転生して来なさい」

「は？」

「聞こえませんでしたか？」

「いや、聞こえましたけど……ってかどうということ!？」

「私は神で、あなたをちょっととした手違いで殺してしまった。だからその償いのためにいくつか能力を持たせて転生させる。という設定ですが？」

いや、そんな判れよみたいな目で言わなくても。……てか、

「設定つて言っちゃいましたよ、この人。まあいいけどさ……」

「あとそれと願いを3つまで叶えてあげるから。それと、転生先の世界は決まっているわよ」

「どこですか？」

「魔法先生ネギマです」

おお、ネギマですか。魔法とか使ってみたいですね。

「じゃ、3つの願いを言ってください」

「うーん……、ちょっと考えさせて下さい」

「わかりました」

ということで、小一時間うんうん唸ってようやく搾り出します。

「決まりましたか？」

「はい、じゃあ1つ目。全ての知識を理解、吸収、そして実践できるようにして下さい。もちろん全部完璧に」

「つまり、魔法も武術もということですか」

「そゆことです。一々分けるより、統合しちゃったほうが楽、もとい良いでしょ？」

我ながら良く考えたと思う。だって、貪欲に学べば学ぶほど強くなれるのだから。

それを聞いて、絶世の美女はふつと笑う。

「ええ、構わないわ。では残り2つ」

「2つ目は才能の限界をなくして下さい。努力次第でどこまでも強くなれるように」

つまり、頑張れば頑張るだけ強くなるという、ナニコノチート？

「わかりました。最後の1つ」

「Fateの心眼（偽）のようなスキルのなものを。第六感的な感じで」

感性に関しては努力とかのしょうが無いしね。

「それでいいんですね？」

「はい」

「わかりました」

軽く頷き、俺は少し目をつぶる。

しかしま、死んだ、かあ……。まあ、誰も悲しまないことが唯一の救いかな？

「ま、次の人生、せいぜい死なないように楽しみましょうか」

「では、汝の次なる生に幸あれ」

テンプレのような声を掛けられたのと同時に、俺の意識は落ちていった。

転生、あるいは設定（後書き）

どうでしたか？私の駄文は。

文才のない自分が書くものはこんな程度です。余り期待しないで下さい。

感想、質問などお待ちしておりますので、今後ともどうかよろしく
お願いします。

では、また次回に……

状況確認、あるいはこれから（前書き）

皆さん、ども。久我原 紗江です。

テンプレな前回ですいません。

と、まあ…

それではヘタレな作者がお送りします、

英雄の娘は転生者 幼少編（というかプロローグ？） スタートで
す。

状況確認、あるいはこれから

Side : アリス

皆様、こんにちは？こんばんわ？おはようございます？

私、この度転生いたしました、アリス・スプリングフィールドです。

……ええ、そうです。『スプリングフィールド』です。

それにしても、あの自称神はいつたい何がしたいのでしょうか。

と、いうのも性別が女性になってるわけで……はあ。

で、私はネギと二卵性双生児ってことらしいんですよ。

しかも容姿が母親、つまりあの『災厄の魔女』アリカ・アナルキア・エンテオフュシアに酷似という。

……何この満載の死亡フラグ。

なにか私に気に食わないことがあったんでしょうか。私で発散しない下さい。

というわけで髪は白に染めて伊達めがねを掛けています。これでたぶん大体はれません。……ばれなかったらいいなあ。

そして、ネカネ姉やアーニヤ姉がウェールズの魔法学校に戻ってから半月程が経ちました。

……え？時間の経過が早すぎないかって？そんなこと言われても特に何もなかったんですから仕方ないのです。

で、とりあえず最近、ネギ兄がいろいろと危ないことをしています。

木から飛び降りたり、猛犬に悪戯したり……

しかも、昨日に至っては湖に飛び込んだらしい。しかも真冬の。

案の定風邪を引いたようで……

なので、それを知ったネカネ姉が飛んで帰ってきて、現在ネギ兄の看病をしています。

……莫迦なんですかね？ネギ兄は。

しかも、何故そんなことをしたのかネカネ姉が聞くと、

「だって、危機ピンチになったら、お父さんが来てくれるって思ったから

……」

なんてぬかしやりました。

前言撤回です。あなたは莫迦者の自殺志願者です。

少し失望、もとい呆れてしまいました。

たぶんネギ兄は自分のやった事が他人に迷惑を掛けているということを理解してないんでしょうね。

しかも、周りの人たちはそんなネギ兄を叱らない。

むしろ、サウザントマスターに似て悪ガキだと、元気があるのはいいことだ、とまるで褒めているみたいです。

叱っているのはネカネ姉だけです。まあそれでも少しはまだ甘いですが。

……やはり、叱らないのは英雄の子だからでしょうか？ 英雄の子なら何をしても許されるのでしょうか？

くだらないです。反吐が出ます。

私は一応前世の記憶とかがあるので大丈夫ですが、もし何も知らなければネギ兄のようになっていたでしょう。

こんな人たちといったら私までおかしくなりそうです。

今後の方針について纏めておきましょう。

とりあえず、悪魔襲撃には介入しません。

教える気もありませんし、それをしたからといって大して変わりませんし……

てか1人の餓鬼に何をしろと？

次、魔法学校では落ちこぼれに徹します。

というのも、有名になってしまえばばれてしまう危険性が高まるからです。

まだ私は死にたくありません。

ん？ 虐め問題？ そんなのフルボッコにして（ry

と、

麻帆良に行くまでのイベントはこのぐらいだったでしょうか？

余りネギまは読んでませんでしたし、そもそも前世とかの記憶が曖昧です。

麻帆良の後のことは卒業式で「日本で教師」的な修行内容になってから考えましようか。

とりあえずは、早急に家を出る。

なんて決意を固めつつ私はベッドに潜り込みました。

状況確認、あるいはこれから（後書き）

今回も私の駄文に付き合っただき、ありがとうございました。
麻帆良が本編とするならば、一応プロローグ編ということになります。

方針としては、アリスはチートにはする気はありません。
ただ、他の魔法先生よりちょっと強いくらいに、と。

それはともかく、また次回お会いできるように祈っています。

明星、あるいは技術演習（前書き）

まず、始めに。

こんな小説を読んで下さった方が何人居るか分かりませんが、更新が遅くなつてすいません。

大体これからもこのペースで進んでいくのであしからず……

明星、あるいは技術演習

「……………ん？」

私はとある一冊の本を見つけて発掘の手が止まりました。何でしょうか、この本能に働きかけるような感覚は。引っ張り上げて埃を払います。

題を見ると、『凜々の明星』とありました。

どこかで聞いたことのあるような……………

凜々の明星、凜々の明星、凜々の明星、凜々の明星……………

……

！！

いやいや、そんなことは

とりあえず、確認です。

パラパラ、とページをめくります。

「……………」

やはり、某黒髪の青年が法で裁けない闇を裁く物語でした。

これは掘り出し物です。

絶対に手に入れなくてはなりません。

というわけで、とりあえず交渉開始です。

「おじいちゃん！これ、くれませんか？」キラーン 効果音

「ああ、いいぞ」キュピーン 効果音

交渉時間 8秒。

交渉結果 成立。

早っ！

ちよっ。結構どうやって論破しようか考えてましたのに……。
まあ、貰えたからいいです。

さて、いろいろと計画変更です。

家出のついでに私の能力でこれを学びましょうか。
と

「ちよっと待て、嬢ちゃん」

「？」

店を出ようとしていますとおじいちゃんが声を掛けました。
ちっ、やはりタダでは行きませんか？

目当ては何ですか！やはり私のから（ry

「特典だ。持ってけ」

そう言って、おじいちゃんは何かを投げてきました。

「？ペンダント、ですか？」

「ああ、その本に付ていたやつだ。……まあ、俺が色々改良したが
な」

おじいちゃんはニシシと老人らしからぬ笑いをします。

てか、改良って……

「一応、ありがとうございます？」

「おう、感謝しろよ」

「……はあ」

私は後ろで手を振るおじいちゃんの声援を受け流しつつ、両手一杯に埃っぽい本を持って店を出ました。

あれから数週間後。

Side : アリス（再び）

さて、皆さん。今私はどこにいると思います？

『毎回恒例！アリスを探せ！』

。

……って分かるわけですね。

別に続ける気、ありませんし。

今私は、村の近くの山の中で一キャンプ（野宿）生活をしています。つまり、家出しました。齡2歳で。

勿論、ちゃんと報告はしましたよ？……ネカネ姉だけ、置手紙で。大丈夫です。月1には帰ります。多分。

「……それにしても、何とかなるものですね」

家を出てからかれこれもう一週間です。

最初のほうは少し手間取りましたが（食材とか）、何とかになりました。

さて、今は修行の時間。今日は実践に入りたいと思います。

この『凜々の明星』という本を解析して分かったことですが、本物ではありませんが、本物それに似た（といっても本物と大差ない）魔術ものはできるみたいです

しかも、あのペンダントは魔力の塊のようなもので、ポイディ・プラスティア武醒魔導器と同じ役割をするみたいです。

おじいちゃん、Good job です。

「さて、始めましょうか」

そう言って、読んでいた『凜々の明星』を閉じ、精神を統一します。外気に含まれる魔力を感じるのです。

すると、段々とふよふよした、色の塊のような物が視えます。

その塊は、私が意識すると、まるで私に吸い取られるように混入します。

「ここまでが昨日までの段階。

「 煌く焰、」

ゆっくりと、確実に、呪文を唱えます。
すると、足元に紅い魔方陣が現れます。

「 猛追」

腕を前にピン、と張り、そこに意識を集中させます。
イメージするのは炎。
それを濃縮して一つの塊にする。

「 《ファイアーボール》！」

勢いよく唱えると、ごっ、と腕の先の空間が燃え、瞬く間に炎の球
が出来上がります。
それは、私が目標認識した岩に向かって引力を無視して一直線に放
たれます。
そして

「……………（汗）」

炎の球は岩に当たると弾け、瞬時に岩を焼き尽くします。
後に残ったのは、溶けて、破壊されて、ボロボロになった岩。
……私、生体兵器ですか？

それにしても、凄まじい威力です。

これはいろいろと期待できそうですね。

ふふふ……。インディグネーションが楽しみです。

明星、あるいは技術演習（後書き）

さて、次回からようやくあの『悪魔の日』です。

まずは謝辞を。

水色さん、感想ありがとうございました。
感想書かれるって嬉しいことですね。

それではまた次回と……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3951n/>

英雄の娘は転生者

2010年10月11日00時17分発行